

1 調査の概要

(1) 調査の目的

調布市立学校においては、新型コロナウイルス感染拡大防止に伴い、令和2年3月から5月までの3か月間を臨時休業とした。6月からの学校再開後、学校は、前年度の指導の積み残しや新年度の教育課程の見直し、新たな年間指導計画に基づいた授業の実施を行ってきたところである。12月現在、当該学年の指導事項は習得させられる見通しが立ったところではあるが、児童・生徒の学習の定着状況を把握する必要があることから、本調査を実施した。

2 調布市教育プランとの関連

(1) 施策及び主な取組

施策2 【確かな学力の育成】 <主要事業 5 基礎的知識・技能、学習満足度の向上と学ぶ意欲の育成>

- 一人一人の児童・生徒の主体性を育み、少人数・習熟度別指導等による確かな学力の育成
- 少人数指導講師の配置
- タブレット端末等、ICT機器の計画的な整備・活用による学習活動の充実

(2) 調査日と調布市対象児童・生徒

- ① 令和2年10月から11月まで
- ② 調布市立学校 小学校第5学年全児童 中学校第2学年全生徒

(3) 調査内容

- ① 都「令和2年度児童・生徒の学力向上を図るための調査」問題を活用（ペーパーテスト方式）（都では、7月に予定していた調査を中止）
国語、算数・数学の2教科において、学習指導要領に示されている目標や内容の実現状況の把握
- ② 市「児童・生徒質問紙調査（質問紙形式）」の実施
児童・生徒の学習や生活に関する意識、生活状況などを把握するための内容

(2) 成果指標（参考）

	校種	R4目標値	基準値	H30	R1	R2
「自分たちで課題を立て、話し合いながら学習活動に取り組んだ」と回答した児童・生徒の割合	小学校	80.0%	78.6%	70.8%	71.1%	82.9%
	中学校	80.0%	74.6%	65.5%	65.8%	78.8%

3 調査の結果（※▲は、昨年度より下回ったもの）

(1) 各教科の平均正答率（％）

国語	小学校		中学校		算数・数学	小学校		中学校	
	令和元年度	令和2年度	令和元年度	令和2年度		令和元年度	令和2年度	令和元年度	令和2年度
	68.6	69.9	73.4	79.8		62.4	69.6	54.0	60.4

(2) 観点別調査結果の平均正答率（％）

国語	小学校		中学校		算数・数学	小学校		中学校	
	令和元年度	令和2年度	令和元年度	令和2年度		令和元年度	令和2年度	令和元年度	令和2年度
話す・聞く	69.7	79.9	77.4	86.5	思考・判断・表現	48.7	57.7	31.3	55.7
書く	72.0	▲58.1	60.2	78.8	技能	67.7	76.1	62.0	72.4
言語	66.2	▲63.1	70.0	79.1	知識・理解	70.1	▲66.1	62.2	▲55.8
読む	69.4	77.3	81.1	▲79.6					

(3) 市質問紙調査（一部抜粋）肯定的回答（％）

質問項目	小学校	中学校
①課題の解決に向けて、自分で考え、取り組んでいたと思う。	87.3	84.2
②自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思う。	78.5	73.4
③友達と話し合うとき、友達の考えを受け止めて、自分の考えを持つことができる。	91.2	92.0
④授業では、学習内容を振り返る活動をよく行っていると思う。	80.4	76.1

4 分析

国語科	算数・数学
<ul style="list-style-type: none"> ・小学校は、「書くこと」が昨年度から約14ポイント減少している。授業では、新学習指導要領の学習評価の観点〔思考力・判断力・表現力等〕の「書くこと」の領域における学習過程「題材の設定」「情報の収集」「内容の検討」「構成の検討」「考えの形成」「記述」「推敲」「共有」のどこに課題があるかを把握し、指導の重点を図る必要がある。 ・1人1台タブレット端末を活用した授業においても、タブレット端末の活用場面（情報を収集して整理する場面、考えたことを共有する場面等）を計画的に位置付けるとともに、児童・生徒の実態に応じて、文字を書かせる指導も行う。 ・中学校は、「読むこと」が昨年度より1.5ポイント減少しているが、その他全ての観点において、約10ポイント増加している（「書く」については18ポイント増）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校、中学校ともに、昨年度から「知識・理解」が減少している（小学校は、4.0ポイント減、中学校は、6.4ポイント減）。授業では、公式を覚えるなどの知識の習得だけではなく、その公式をどのような場面で活用できるのかといった理解を伴うものにしていく必要がある。新学習指導要領では、学習評価の観点「知識・技能」になるが、この「知識」には「理解」が含まれることを認識し、理解の伴った知識・技能となるよう指導することが重要である。 ・思考・判断・表現は、昨年度より増加傾向にあるものの、他の観点と比較すると低い実態がある。学習指導要領に示されている思考・判断・表現の内容を踏まえ、例えば、「数と式」の領域において、計算の性質を見いだしたり、計算の仕方を考えたり、計算を工夫することを授業に取り入れるなど、思考・判断・表現の育成を図ることが大切である。
市・質問紙調査	
<ul style="list-style-type: none"> ・「②自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思う」及び「④授業では、学習内容を振り返る活動をよく行っていると思う」は、他の項目に比べて低い傾向にあった。 ・②については、感染症対策により、少人数やグループでの話し合い活動等に制限があったことも影響していると想定できる。授業改善として、「考えを形成」する過程において、相手意識、目的意識をもたせ、「内容の検討」や「構成の検討」の過程における個の学びの充実を図っていく。 ・④については、新学習指導要領の学習評価の観点「主体的に学習に取り組む態度」において、「自己調整」が求められている。授業終盤での「何ができるようになったか」「どのように考えたか」「学習したことが次の学習や生活にどのようにつながるか」といった視点での振り返りの充実を図るとともに、思考過程においても、自己の考えを振り返り、考えの再形成ができるよう、授業設計を行っていく。 	

5 考察及び今後の取組について

コロナ禍における学習の定着状況については、本調査の結果から概ね定着しているといえる。このことは、学校が、年間指導計画の見直し及び新たな年間指導計画の実施が適正に行われ、児童・生徒一人一人を丁寧に把握し、指導した成果であると考えられる。また、特に算数・数学科の技能の向上は、学校での授業と家庭学習との関連をもたせた学習機会や短い期間に集中して技能を習得させる学習活動の設定に効果があったものと考えられる。

今後は、1人1台のタブレット端末の導入に伴い、これまでの実践の上に、ICTを組み入れた授業を構築していく必要がある。1人1台の端末を活用し、関心に応じて資料を集めたり、自分のペースで学習したりする時間を確保するとともに、習得したことを活用できる課題を設定するなど、1単位時間の授業設計から単元を通じた授業設計を行っていくことが必要である。